

長瀬と森越 ルーツを探る旅（その1）

1. 「長瀬」の地名の由来

長瀬という地名がどうしてできたのか、はっきりとはわかっていません。

一説には、大昔の矢作川は北野より下流に広がって幾筋にも分かれ、洪水の度ごとに流れが変わり、長い瀬のように流れていました。その様子から「長瀬」と呼ばれるようになったと伝えられています。

右の絵は松応寺蔵古絵図で、左上部に北野廃寺、中央に矢作川が描かれており、矢作川の左側に幾筋もの長い瀬が流れていることが描かれています。

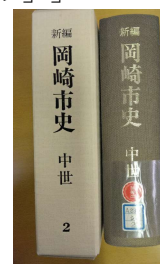


2. 「長瀬」の地名はいつ頃誕生したのか

『新編岡崎市史 中世 2』の88頁に「承久の乱後は碧海荘に足利義氏が新補地頭として入部する。前司が京方武士であったとすれば、その名を長瀬次郎といったかもしれない。というのは、建暦二年（1212年）に尾張国の近衛家領岡荘の地頭に補任された人物が「参川国住人字長瀬次郎」であり」と記載されており、歴史上初めて「長瀬」が登場します。

足利義氏が新補地頭としてこの地に入部し、長瀬次郎と名乗ったのであれば、地名の「長瀬」はそれ以前から存在していた訳で、これがいつかは読者の考察としたい。

また、『滝山寺縁起』（滝山寺文書7）に「佐馬四郎源ノ義継、長瀬四郎と号す」とあり、足利義氏の子義継が長瀬四郎を名乗ったことが記載されています。



さらに前掲の『新編岡崎市史 中世 2』の90頁 碧海荘の郷の項では、「鎌倉時代

後期の碧海荘の様子を多少とも 新編岡崎市史 中世 2

伝えている史料に、「紀伊続風

土記」附録所載の永仁三年（1295年）八月の熊野山日供米碧海荘配分状がある。

この文章は熊野山日供米碧海荘配分事とあるので、年貢＝熊野山日供米を碧海荘内の郷々へ配分（賦課）し、それぞれの郷がこの年に負担すべき額を定めたものである。」とあり、

この配分表の郷名の中に「長瀬郷」の記載があり、これが「長瀬」の書面としての初出となっています。



第1章 京都と鎌倉のあいだ				
表1-1 永仁3年8月熊野山日供米碧海荘内郷々配分表				
郷名	配分高	備	考	
占部郷	114	定国村、正名村、国正村、中村		
中之郷	42.8	中之郷村		
村高郷	29.87	村高村（現安城市）		
下青野郷	35.3	下青野村		
宇津部郷	24.73	中島村、中切村、宗定村、川端村、国江村、阿弥陀堂村（現豊田市）		
薬師寺郷	4.47	？（上渡村に薬師畔の小字あり）		
橋津郷	8.65	柱村（ただし額田郡）		
良針郷	2.47	筒針村		
下渡郷	11	下渡村		
長瀬郷	70.5	森越村、北野村、軸越村、橋目村など7か村		
宿石郷	1.4	？（宿とあるので矢作西宿か）		
小針郷	5	小針村「尾藤兵衛六部分」		
樽戸郷	4.2	暮戸村		
南小崎郷	4.2	尾崎村（現安城市）		
同郷三分一	1.1	〃		
牧内郷	1.1	東牧内村、西牧内村		
上戸郷	38.89	？（ウヘト→ウト→ウトウと転化し、宇頭村か）		
大友郷	10.54	東大友村、西大友村		
計	(410.22) 409.5	郷名の記載順は史料のまま ・備考欄には近世の村名をあげた ・出典：『鎌倉遺文』25-18898		

3. 「長瀬山」と「森越山」

豊田市榊塚東町から岡崎市北野町にかけて、起伏のゆるい松林と荒地からなる、長瀬山と呼ばれた一帯が



おおよそ白円の内側が**長瀬山**と呼ばれたところ
おおよそ黄円の内側が**森越山**と呼ばれたところ

ありました。

この地は、江戸時代には下草や雑木を取るための入会権が設けられた山野でもありました。

農山村に生活する者にとって、山野は欠くことのできない、家の作材・薪炭材、下草・落葉など、地力維持のための肥料や牛馬の飼料の供給地でありました。

江戸時代徳川家綱の治世 [[慶安四年（1651年）から延宝八年（1680年）]]では、全国津々浦々に開拓・開墾が奨励され、いたるところで開発が行われました。

松林と荒地であった長瀬山でも、一部の人たちにより開墾され、耕作が行われるようになりました。

この時期、森越は石高が倍増（表1）しており、北野町の長瀬山を開拓していた事がうかがえます。

そこは、森越山あるいは森越村と呼ばれていて、現在でも、森越町の旧家の多くが土地を所有しており、「山畑」と呼んでいます。

岡崎領のうち森越の石高とその変遷

（表1）

年代	寛永十二年	寛文四年	寛政元年	天保五年	明治元年
西暦	1635年	1664年	1789年	1834年	1868年
石高	単位一石	同左	同左	同左	同左
森越	114,735	223,714	234,840	311,335	246,165